教育心理学教室教官の研究状況報告

この1年の歩み —昭和51年度—

村 上 英 治

1）生きる人間存在への関心は，このところ私にとっていよいよ強いものとなってきている。心理学，あるいは教育心理学における人間接近への方法論は，かけがえのない独自の人間主体の，価値実現に向かっての無限の可能性を模索するみちづけであらねばならないとする視点に立って，私は学部における「教育心理学概論」の講述を，私なりに展開していくことを試みはじめている。51年9月，千葉大学において開催された特殊教育学会でのシンポジウム「実践研究と理論研究」の司会をつとめ，心理学研究の志向性を模索したのも，「心理学研究法」シリーズ以来のこの線に即したものといってよい。

2）臨床心理学とは何かと問いつづけて，すでに四半世紀を経過した。基本的視座は，障害者との出会いの最初からほとんどかわるものではないが，44年の大学紛争，学会紛争以来，きびしい告発を含めての状況を問いかける激しいゆさぶりかけをうけて，私なりに動揺しつづけたこのとしどしであった。しかしそれなりに，これらのさまよいの中からふたたび，私自身の志向性を明確化しようとする契機が生まれようとしてきていることを，私は今感じとっているのである。

とりわけ新しいプロダクトとはいえないが，45年以降ここ数年とりくみつづけ，その体験を仲間との討議の中からひととし，ひととしまとめつづけてきた「重度精神薄弱児への人間学的接近」は，序報から数えて一昨年の第6報まで，その積み重ねを川島書店から，「重度心身障害児 ——その生の意味と発達——」と題して，51年11月に刊行する運びに到った。私なりの一里塚として一つの思いである。

やはり同じく，来る年も来る年も，その基本的接近様式のみを強調してきた，精神分裂病を生きる人びとを対象としての，ロールシャッハ法にもとづく現象学的接近も，ようやく仲間とともに最後の討論を終えて，1本にまとめる運びに到った。東京大学出版会から，52年8月末には，「ロールシャッハの現象学——分裂病者の世界——」と題して刊行される予定である。

重度の心身障害者が対象であれ，精神分裂病者が対象であれ，この両者に共通して，私自身臨床実践の中で模索しつづけた，この種の人間存在への接近様式が，今の段階での私の基本的志向性であることを，ここで改めて明らかにしておきたい。

3）この志向性は従って，当然それ以降も引きつがれている。「重度心身障害幼児における人格性の発達に関する研究——集団療法活動をとおして——」との主題のもと，51年度文部省科学研究費を得て，従来行ってきた臨床棟における発達障害幼児を対象としての集団療育を特に療育合宿を中心に強力におしすゝめていくことをめざしたのが，51年度での一つの目標でもあった。昨年の紀要23巻での一連の報告にひきつづいてその実践は，発達障害幼児の療育合宿——日常の療育活動との関連の中で——」として，主として大学院生後藤秀爾の手によってまとめられ，本紀要に報告されることになる。

さらにまた51年8月末，第7回目になる恒例のコロニー実習は，そこでの体験を数年にわたって積み重ねた大学院生後藤秀爾，譲西賢，江口昇勇によって，体験の拡がりと深まり，さらに施設という状況の中での生きざまという形で，第7報から第9報まで，同様この紀要に所載されるところとなる。

精神分裂病者の世界を問いかける視点は，たましいを病み，精神を傷つく，その他の多くの障害者にも，当然同じ視点として向けられていかねばならない。躁うつ圏に属する精神病者の，ロールシャッハ・カードXに示された知覚様式は，分裂病者と対比して，その内的世界においてきわめて相異なる様相を示す。大学院生池田博和らとの八事病院における実践は，この年その方向ですゝめられ，同様本紀要に，「分裂病者と躁うつ病者のロールシャッハ反応様式」として，池田を中心にまとめられ報告されている。

いずれも前項に示した基本的視座をうけつぐものであり，それの展開といってよい。

4）学生相談活動に関しても，毎年1月，ここ10年継続しての研究会議が，52年1月，東京大学の世話によってこの年もすゝめられた。その意義はとしどしに新たではあるが，最近この領域に関連してかなり中核の課題となっているグループ・アプローチを，これら関係教官の間で持とうとの提案がその前年から提起されてきた。個人的な都合でその年は参加できなかったものの，それにつづいて第2回のエンカウンター・グループが九州大学の世話で51年7月，阿蘇九重高原で開かれた。臨床活動

にたずさわって25年，これまた私にとって彩鮮で，まさしく眼からウロコのぬけ落ちる思いのなまなましい体験であったことを，ここで報告しておきたい。

5）そのほか，各方面に単独で，あるいは共同の形で名を連ねた研究報告は，書き散らした雑文をも含めて，この1年の研究活動の歩みのあとずけとしてそれぞれに，私なりに大切であるが，そのすべてをここであげることはさし控えたい。ただ私が長くそこに職を奉じた名古屋大学教養部において，鈴木達也教授の停年退官にあたり同教授の手によって編まれた，52年3月，福村出版刊の「心理学ゼミナール」の中に，誘いをうけて，「投映の世界」と題する章を担当し，人間接近への新しい方向づけをここでも提起したことだけをつけ加えておきたい。先学鈴木教授への学恩に，いささかたりとも酬いることができればとの思いからである。

（昭和52年7月31日）

研究経過報告 —2年目— 村上 隆

本年も昨年同様，応募の際提出した"研究経過と研究計画"に則して述べる。いつまでもこれにこだわっているのも進歩のない話なので，こういう書き方は本年限りにしよう。3つの関心領域について順に述べる。

(1) 心理学における測定の論理

昨年の予告通り，difference scaling における，解の一意性について明らかにすることを課題とした。まだ不十分な点も多いが，本紀要の論文"順序距離尺度の数値的表現と一意性特性について"にその結果はまとめられている。当初のアイディアとはかなり異なった道筋を経ることになったが，一応の目標は達成したと考えている。なお不明な点についての検討を続けるとともに，本文中で述べた conjoint measurement への拡張を通じて，より有用なデータ分析のモデルとしてゆくことを本年の課題としたい。

(2) 心理物理的尺度構成におけるそれらの論理の検討

明度尺度に関する実験を継続した。今回は，上記の一意性の問題の検討に資するために，条件を縮小し，一定の反射率の背景上において，明度差を反復測定するという実験計画をとった。この結果については，本年の日本心理学会第41回大会で発表される。なお，この実験は，1名の被験者について，1日1時間ずつ，20日間を要した。尺度構成法として実用的なものにしてゆくには，この所用時間を減らす工夫に加えて，ほぼ同等の結果の得られるような，より直接的で簡単な実験法を見出す必要がある。この項については，これが本年の課題。

(3) 多次元解析的手法

本学大学院の後藤宗理，辻本英夫両氏とともに，三相データの分析法について，研究（というより現在のところは学習というべきか）を開始した。この分野で開発された手法の幾つかのプログラミングと，手持ちのデータへの適用という形で現在のところは進めている。その一部は，本年の行動計量学会第5回大会で発表される。今後は，問題領域と，データの性質に合わせた，手法の分類と開発にまで進みたいと考えている。なお，項目分析のためのクラスター分析の単純な一方法についての検討を個人研究として行ったが，本紀要では発表に至らなかった。

これも含めて，昨年この欄で予告した2つの論文は，いずれも完成させることができなかった。結局，時間の上手な使い方，というのが最大の課題であろうか。

この一年間の研究経過 蔭山英順

私の研究活動の大部分の時間は自閉児の遊戯治療の実践活動で費されている。本年度は年少の自閉傾向を持つ幼児，特に2歳代から経過を見ることのできたケースをインテンシブに見てきている。こうした早期に発見し，治療的援助をしながら経過を見てみると，3歳代に入って，興味限局及び同一性保持傾向を顕著に示すケースと自閉傾向を軽減していくケースの存在を確認した。そうした経過を規定していく要因に関して，自閉傾向を形成していく成因論の関心から現在検討中である。

さらに，従来の研究の継続として，自閉児の学校教育の研究を協同研究として展開してきた。本年度は本紀要に発表したように，情緒障害児学級における授業分析を通して，自閉児の指導方法の問題にアプローチした。こうした研究活動を通して，さらに，現場教師との深い連